

著：松田 光弘

誰も教えてくれなかった皮疹の診かた・考えかた
[Web 動画付]

書評者：國松 淳和(医療法人社団永生会南多摩病院総合内科・膠原病内科部長)

さて書評である。

この本の書評は難しい。なぜならとても良い本だからだ。

良い本。買ったほうがいい。本来これで終了である。

この本は、ちゃんとした医学書である。

その点が非常に重要である。

各所で言ってしまうているかもしれないが、教科書というのはある事柄の「全体」を標準的(時に画一的)に扱うものであるが、ガイドラインなどと違い、具体的なことよりも抽象的なことを教えてくれるものだと私は認識している。

ここ数年以上の「医学書」のトレンド・趨勢は、とにかく「図表が多く、わかりやすく、まとまっていて、すぐ役立つもの」である。そうでないと売れないからだ。ガイドライン^{はんよう}というものも非常に汎用されている。まあ、なんというかわかりやすいからだろう。これらはつまり、標準的な「全体」をカバーし、かつ抽象ではなく具体を扱っている。

この本は、「皮疹の診かた」というある程度の「全体」が扱われている。そしてちゃんとした教科

書であり、解説内容も説きかたも堅実で、意味としては抽象を(著者もほぼ無意識に)扱っている本である。この本のやや特異な点は、「全体」と言いつつ、初期研修医などが学ぶべきこと全体からしたら「皮疹の診かた」というやや「個別」を扱っているという点だ。

ここまでで私が何を言おうとしているかきつとわからないだろうが、私個人は自分で書いていて腑に落ちた。

この本は「読ま」なければならない。参照して、重要なところだけ拾い読みする本ではない。これを省略すると、この本の真骨頂である、「皮膚科診療という“個別”から、真の意味で応用の効く抽象的な理解を得る」ことはできない。

……ああ、それってごく普通のことではないか。教科書から学ぶということにおいて、そんなことは普通。ただ、これをことさら言わねばならないことが問題だと思う。医者は本当に医書を読まない。読まずによく臨床ができるなと思う。どんどん出る新しい論文

をフォローするだけで臨床スキルをアップデートしていける人は全体のごくわずか(オリンピック：全人口比くらい?)だろう。

少し脱線してしまったが、本書の解説に戻ろう。

非専門医にとっての「皮膚科の本」といえば、各皮膚疾患が皮膚画像とともに解説がされてあって、読む側は「絵あわせ」的に参照して、今みている患者の皮膚を思い出してこれかな～のような関わり・使いかたになるであろう。

この本は違う。そういう解説の仕方は一切していない。ロジックを重視。臨床的な「頻度」がしっかり意識されてある。読者を、明瞭に「初期研修医」に合わせてある。

良い本。買ったほうがいい。これで終了である。

● A5・頁 264 2022 年 1 月
定価：4,400 円
(本体 4,000 円+税 10%)
[ISBN978-4-260-04679-4]
医学書院刊